

西尾市資料館
企画展

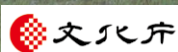
西尾城跡

発掘調査

40年の あゆみ

令和6年

7.6日→9.29日



地域の特色ある埋蔵文化財活用事業

西尾市教育委員会

江戸時代の西尾城は、西尾藩の政治の中心を担うとともに、西三河南部の経済・文化の中心として発展しました。

明治維新後、西尾城は廃城となり城郭の建物や土地などは売り払われ、城下町も市街化がすすみ、かつての景観は失われてしまいました。

西尾城跡では昭和59年(1984)の発掘調査以降、40年の間に16回、延べ10,000㎡におよぶ調査が重ねられてきました。これまでに調査が行われた範囲は城跡のごく一部ではありますが、その成果から在りし日の西尾城の姿が蘇りつつあります。

本展では、これまでの発掘調査の成果を紹介します。



調査区位置図

■ 発掘調査の一覧

	調査地点	期間	面積(㎡)	調査事由	主な成果
第1次	東之丸	昭和59年(1984)6月～9月	2,756	運動場拡張	織豊期末の大溝、江戸時代の侍屋敷跡
第2次	東之丸	平成元年(1989)4月～6月	600	校舎建築	弥生時代の竪穴建物、織豊期の堀跡
第3次	東之丸	平成2年(1990)5月～6月	1,200	体育館建設	弥生時代の竪穴建物、織豊期の堀跡、江戸時代の米蔵・長蔵基壇
第4次	本丸／二之丸	平成6年(1994)5月～10月	2,550	歴史公園整備	本丸丑寅櫓の礎石、織豊期末の丸馬出、鎗石門に関する遺構
第5次	東之丸	平成7年(1995)11月	100	防災水槽設置	戦国時代の屋敷跡、江戸時代の屋敷地
第6次	二之丸	平成19年(2007)11月～12月	150	城郭確認調査	二之丸丑寅櫓の関連遺構・二之丸の堀跡
第7次	二之丸	平成20年(2008)12月～平成21年(2009)2月	1,000	歴史公園整備	織豊期の障子堀、二之丸御殿関連遺構
第8次	東之丸	平成23年(2011)11月～12月	150	子育て支援施設建設	戦国時代の区画溝、江戸時代の井戸
第9次	二之丸	平成24年(2012)12月～平成25年(2013)2月	320	歴史公園整備	天守台遺構・石垣
第10次	本丸	平成31年(2019)3月	30	遺構確認調査	本丸裏門石垣の構築方法
第11次	東之丸	令和2年(2020)12月	53	個人住宅建設	戦国時代の屋敷地
第12次	北之丸	令和4年(2022)5月	74	宅地造成	北之丸の堀跡
第13次	東之丸	令和4年(2022)7月～8月	70	防災施設建設	江戸時代の屋敷地・米蔵
第14次	三之丸	令和5年(2023)2月～3月・5月	120	集合住宅建設	江戸時代の井戸・柵列、明治時代に作庭された庭園
第15次	三之丸(大手門)	令和6年(2024)1月～3月	341	遺構確認調査	大手門の関連遺構
第16次	三之丸	令和6年(2024)3月	50	個人住宅建設	鎌倉時代の土坑、江戸時代の井戸

西尾城創建以前

西尾城は碧海台地の端部に築かれ、周囲は湿地に囲まれていました。古墳時代以前は、すぐ近くまで海岸線が入り込んでいたと考えられています。

水場が近くにあったこともあり、発掘調査では縄文時代以来、人の生活の痕跡が見つっています。特に弥生時代中期後半～後期(約2,100～2,000年前頃)の遺構・遺物が多く、竪穴建物23棟、方形周溝墓(弥生時代の墓)2基、土器や石包丁などの石器類が見つっています。その分布は二之丸・東之丸・三之丸と広範囲に広がることから、大規模な集落が営まれていた可能性があります。

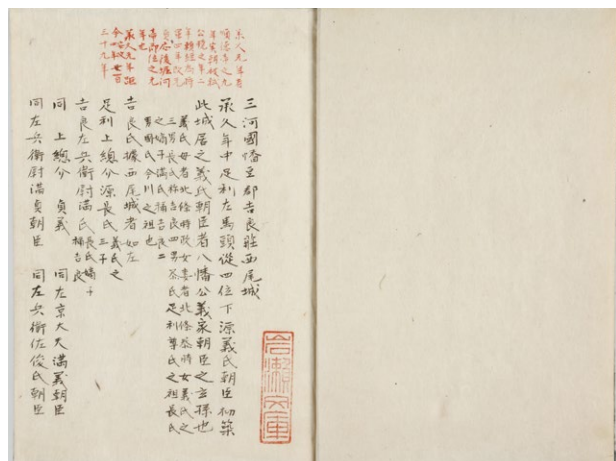
このほかにも、奈良時代の土器などが見つっています。



第4次調査区 弥生時代の竪穴建物跡(東から撮影)

1185 - 1467 年

鎌倉・室町時代 ～西尾城の創建～



『鶴城紀』(西尾市岩瀬文庫蔵)

江戸時代に編さんされた地誌には、足利義氏が承久の乱(1221年)の戦功によって三河国守護に任ぜられ、吉良^{きらの}荘内(現在の西尾地域の大部分)に西尾城を築いたと記されています。義氏は鎌倉を拠点に活動し、義氏の子の長氏が吉良荘の地頭職を引き継ぎ、領国経営を行ったと考えられています。しかし、西尾城跡から鎌倉時代の遺構や遺物はほとんど見つかっていません。そのため、現在地での承久年間の西尾城創建は疑問視されています。

鎌倉時代の吉良氏の居館は菩提寺の実相寺(上町)の周辺にあったという説が有力ですが、その実態は謎に包まれています。



あしかがよしうじ
足利義氏(1189-1254)

足利宗家3代目。母は北条政子の妹(実名は時子と伝えられる)で、源頼朝の義甥にあたります。

承久の乱での戦功により、三河国守護に任じられました。鎌倉幕府執権の北条義時・泰時を補佐し、「関東の宿老」と称えられました。室町幕府を開く足利尊氏はその嫡流として5代のちに誕生します。



あしかがおさうじ
足利長氏(1211-1290)

足利義氏の長男といわれ、三河国吉良荘の地頭職に任じられます。足利宗家は弟の泰氏が継いだことから、吉良氏・今川氏(長氏の次男、国氏の流れを汲む)の祖となります。建長3年(1251)には鶴ヶ崎天満宮(鶴ヶ崎町)を創建したと伝わります。

鎌倉時代の村?

これまで、西尾城の発掘調査では鎌倉・室町時代の遺構や遺物は極めて少なかったのですが、第16次調査では、鎌倉時代初頭の遺構が見つかりました。遺構のなかからは、大量の^{やまぢやわん}山茶碗が出土したことから、鎌倉時代には西尾城周辺に村があったことがわかります。城との関係はよくわかりませんが、今後の発掘調査の成果が期待されます。



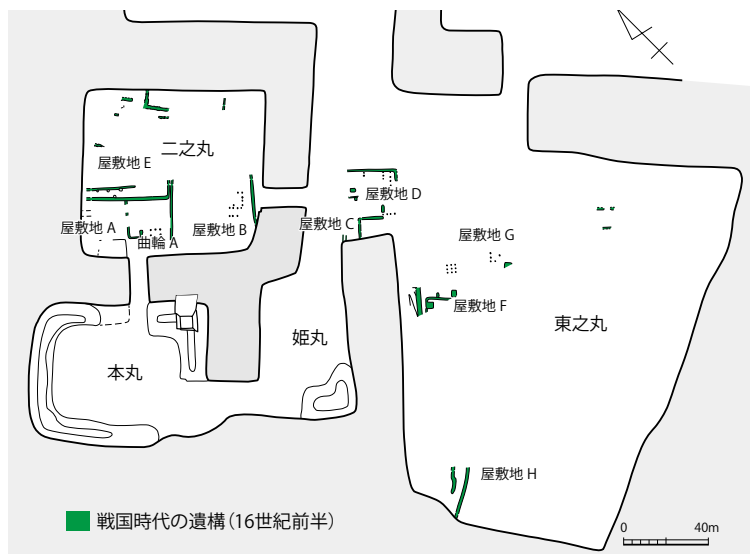
鎌倉時代の遺構(北から撮影)

1467 - 1573 年

戦国時代 ～西尾城の成立～

発掘調査で西尾城の遺構・遺物が確認されるのは戦国時代以降で、これは京から吉良氏が下向した時期と重なります。当時、三河国内は戦乱の渦中にあり、西尾城は戦いに備えて整備が進められたと考えられます。

この頃の西尾城は幅約2m、深さ60cmほどの溝で区画された屋敷地の集合体で構成されていました。中心となる吉良氏の居館は未確認ですが、屋敷地には家臣が居住したと考えられ、瀬戸・美濃・常滑産陶器のほか中国産磁器などが出土しています。



戦国時代の遺構分布図

吉良から今川、そして徳川の城館へ

天文18年(1549)、今川義元は安城城を攻略し、また吉良氏にも今川氏への降伏を勧告します。しかし、城主の吉良義安が勧告を拒否したため義元は西尾城を攻撃し、その支配下におさめました。

吉良義安は西尾城に留め置かれますが、天文24年(1555)に再び今川氏に反逆します。しかし、失敗し、吉良義安は駿河国へ幽閉され、西尾城へは今川氏の家臣が城番として配置されました。

永禄3年(1560)の桶狭間の戦いで今川義元が戦死すると、松平元康(のちの徳川家康)は今川氏から離反し、三河平定へと歩みだします。

永禄4年(1561)5月、松平元康は西尾城を攻め落とし、家臣の酒井政家を城代としました。



酒井政家(1521～1576)

徳川家康の祖父の代から仕え、家康誕生の際にはへその緒を切る大役を務めました。家康が人質として駿府に送られた際には同行し、初陣にも付き添いました。

家康が西尾城を攻め落とすと、西尾城の城代に任命されました。西尾城は徳川家康が家臣に任せた初めての城です。

以降、西尾城は三河南部の支配拠点として重要な役割を担いました。



酒井政家が御剣八幡宮に寄進した鰐口
(御剣八幡宮所蔵・市寄託／市指定有形文化財)

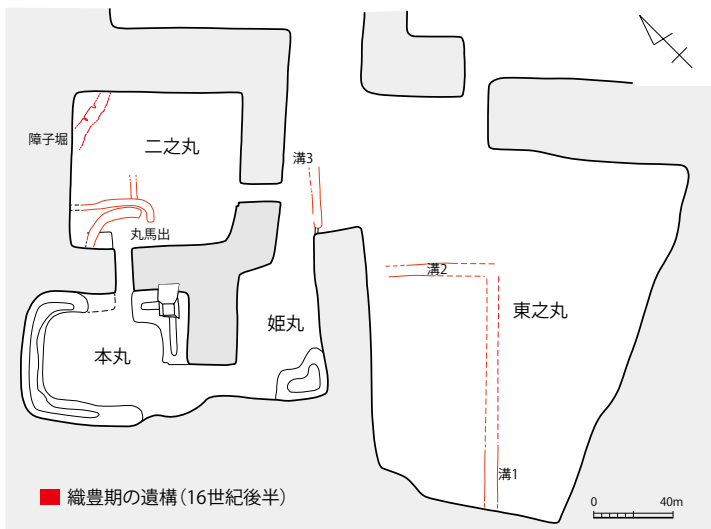
1573 - 1600 年

織豊期 ～近世城郭への変貌～



天正13年(1585)、徳川家康は三河国内の人員を動員して西尾城の大改修を行いました。これは前年の小牧・長久手の戦いより続いていた羽柴(豊臣)秀吉との抗争に備えたものと考えられます。

二之丸で見つかった丸馬出や障子堀、東之丸の大規模な堀跡などはこの改修に関わる遺構と考えられています。これらの遺構は従来の屋敷配置を無視して掘削され、規模もそれまでの遺構とは異なることから、西尾城が本格的な城へと変貌した画期と捉えられています。



織豊期の遺構分布図

徳川家康による西尾城の改修



第1・2・3次調査

第1次調査区の溝1は幅7.5m・深さ2.1m以上、第2次調査区の溝2は幅5.5m、深さ2.5mの大型の溝です。両者は規模や断面形が類似していることから曲輪を囲む堀跡と推定されます。

また、第3次調査区の溝3も幅4.1m・深さ2.1m、断面形はV字形の堀跡と考えられます。

第3次調査区で見つかった堀跡（南から撮影）

酒井重忠(1549～1617)

酒井政家の次男。掛川城攻め、姉川の戦いなどの合戦で活躍しました。永禄13年(1570)頃には家督を相続し、西尾城代となります。天正13年の西尾城改修時には現場で指揮を執ったと推定されます。

天正18年の徳川家の関東移封後、武蔵川越(埼玉県川越市)で1万石を与えられました。子孫は姫路藩(兵庫県姫路市)の藩主などを歴任しました。



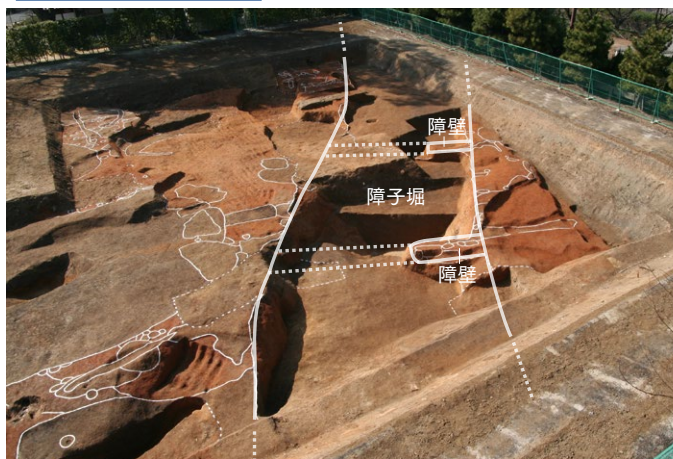
鷹狩りと西尾城

矢作川河口地帯に原野や湿地が広がっていた吉良荘は野鳥が集まる良好な鷹狩り場で、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康らが度々訪れました。

織田信長は鷹狩りの道中に、西尾城に立ち寄り、井戸の水を飲んだとの伝承があります。

家康は浜松や駿府に本拠を移した後も、所用で近くまで来た際には、わざわざ西尾まで足を伸ばし鷹狩りを行いました。

第7・9次調査



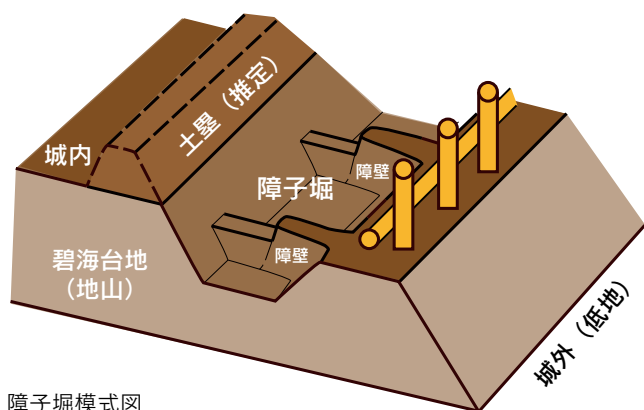
障子堀遠景（北から撮影）



障壁断面（西から撮影）

二之丸の北西角、天守台があった地点では、江戸時代の塁線とは異なる方向の幅7.5m、深さ3mの堀跡が見つかりました。堀底には攻め手の移動を妨げるための障壁が2か所で確認され、障子堀であったことが判明しました。

この障壁は元々あった堀を拡張する際に、地面を一部掘り残して作られていました。堀内からは宝篋印塔や一石五輪塔の一部が出土しました。



障子堀模式図

障子堀

堀の内部に壁(障子／障壁)を設けることで、堀内の攻め手の移動を妨げる役割をはたしています。
代表的な城：山中城(静岡県三島市)

第4次調査



丸馬出全景（南から）



旧近衛邸と庭園

本丸北側にかかる土橋を渡った地点で幅4～5.5m、深さ2.5mの円弧状の堀が2条見つかりました。これは敵の攻撃から虎口(曲輪への入口)を守るために門の外に設けられた丸馬出に伴う堀です。

本丸の虎口に設けられていることから、当時は本丸が西尾城の中心的な曲輪であったことを示しています。

調査後、丸馬出は埋め戻され、旧近衛邸の庭園内に白砂で再現されています。

馬出

曲輪の入口の前方に設置された堀に囲まれた空間です。

堀の形が円形のものは丸馬出、直線的なものは角馬出に分類されます。

代表的な城：諏訪原城(静岡県島田市)

田中吉政による改修

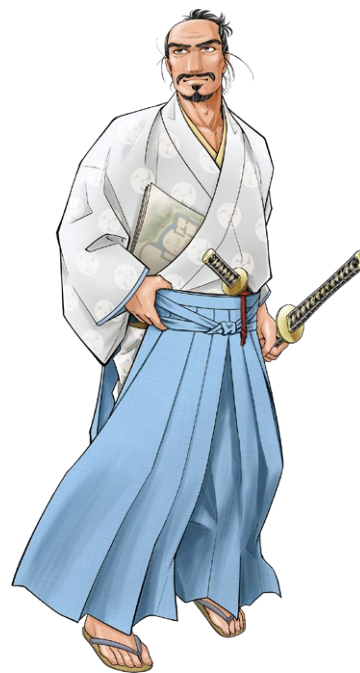
天正18年(1590)に徳川家康が関東に移封すると、三河は豊臣秀吉領となり、文禄4年(1595)頃、岡崎城主であった田中吉政が西尾城主を兼帯します。

『鶴城紀』などの江戸時代に編さんされた地誌には、田中吉政が三之丸の造成を行うとともに、寺社や民家を城下へと移転させたと記されています。これにより城下町が形成され、近世城郭としての西尾城の姿が整えられたと考えられています。

第15次調査では、大手門の出櫓形(12頁参照)の造成前に碧海台地をほぼ垂直に削り、堀を掘削した痕跡が見つかりました。この堀跡は田中吉政による三之丸改修時の遺構である可能性があります。

田中吉政(1548～1609)

近江国生まれ。羽柴秀次の下で、小牧・長久手の戦いなどに参戦。関ヶ原の戦いでは徳川方に付き、石田三成を捕まえた功績で、筑後32万石の柳川城(福岡県柳川市)に移封。
近江八幡山城(滋賀県近江八幡市)・岡崎城(岡崎市)・柳川城の近世城郭整備に携わり、城づくりの名手として評価されています。



戦国時代の遺物



鍋・釜

西尾城内から出土した煮炊き用の土器です。その形状は、肩に取手が付く茶釜、口縁近くに鰹が付く羽付鍋、囲炉裏に吊るすための一對の釣り手が内側に付く内耳鍋など様々です。火にかけたときに、熱がよくゆきわたるように器壁は非常に薄く作られています。

土師器皿

第4次調査の二之丸地点で見つかった土坑内から出土した土師器皿です。

土師器皿は縦4.3m、横2.35m、深さ0.55mの楕円形の土坑内から250枚以上も出土しました。土師器皿は、形状から16世紀中頃に比定されます。一般的に土師器皿は宴席などに使用されたのちに投棄されたと考えられています。西尾城内では各所から土師器皿が出土していることから、頻繁に宴席が開かれていたのでしょう。



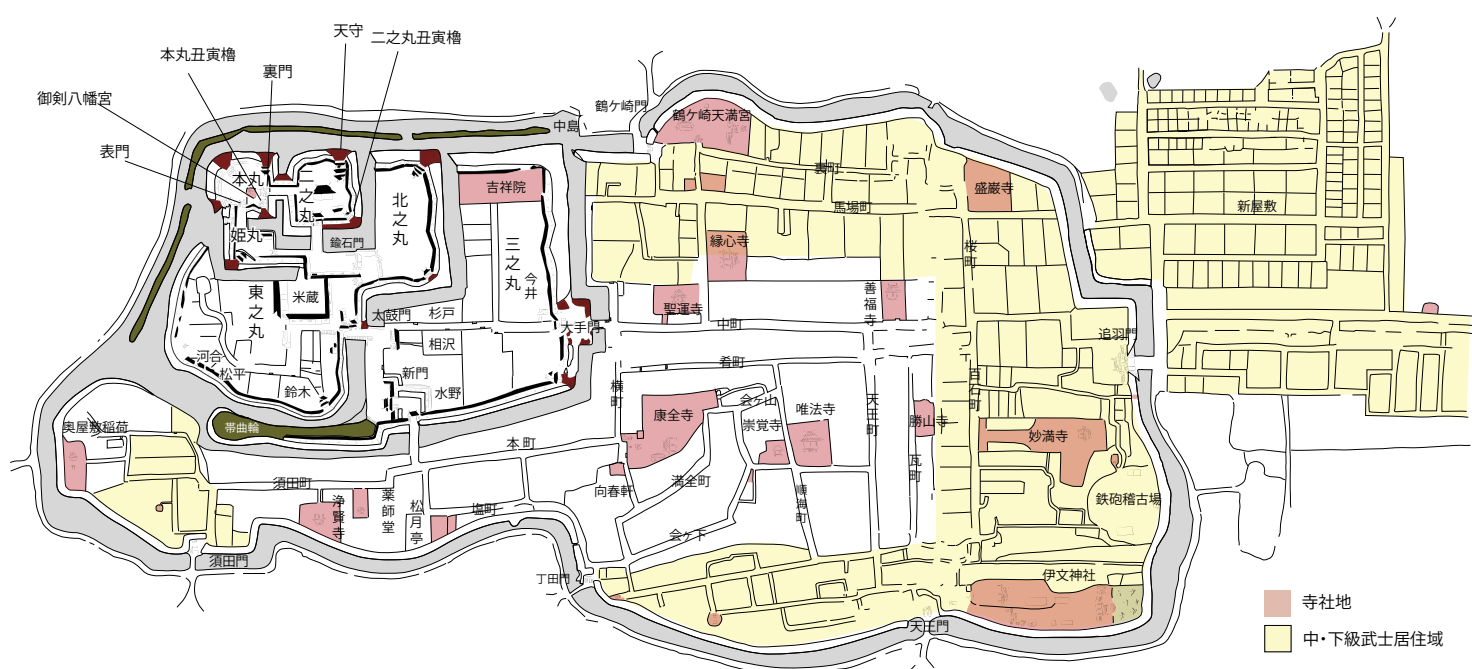
1600 - 1867 年

江戸時代 ～城郭・城下町への発展～

関ヶ原の戦い後、譜代大名の本多康俊が入城しました。江戸時代初期は本多氏以後、松平氏・本多氏・太田氏・井伊氏・増山氏・土井氏・三浦氏と譜代大名が頻繁に入れ替わりましたが、明和元年(1764)に大給松平氏が入城すると幕末まで城主を務めました。

西尾城は、本丸・二之丸・姫丸・北之丸・東之丸・三之丸・^{おびくるわ}帯曲輪で構成された城郭部と城下町からなります。内堀で囲まれた城郭部のうち、東之丸・三之丸には西尾藩の上級武士の屋敷が配置され、三之丸に設けられた大手門・新門によって城下町と繋がっていました。

城下町は、城郭部とともに外堀で囲われた^{そうがま}総構えとなっていて、五か所門(鶴ヶ崎門・追羽門・天王門・丁田門・須田門)から城外へと移動することができました。



「三州幡豆郡吉良庄西尾城之図」(個人蔵/市寄託)
江戸時代末の西尾城を描いた図です。

近世西尾城の始まりと本多氏

ほんだ やすとし
本多康俊(1569-1621)

徳川家康の重臣酒井忠次の次男として生まれました。母は家康の父、松平広忠の妹であり、康俊と家康は従兄弟になります。天正8年(1580)、本多忠次の養子となります。

関ヶ原の戦いに参加し、その功により西尾城主(2万石)を任されました。大坂夏の陣では天王寺・岡山の戦いに参加して首級を105個も挙げ、その戦功により3万石に増徴されて膳所城(滋賀県大津市)へと移封となります。

本多康俊と西尾城下町

西尾城下の産土神である伊文神社の天王祭(現在の西尾祇園祭)に剣旗・鉾を奉納し、祭礼を奨励しました。

また、慶長7年(1602)には実父の酒井忠次の菩提を弔うために縁心寺(中町)を創建しました。



家紋瓦

発掘調査や採集された瓦のなかには歴代藩主の家紋をあしらった家紋瓦があります。家紋瓦はその藩主の時代に瓦の葺き替えが行われたことを示す資料でもあります。

そのなかで最も多く見つかったのが本多氏の立葵紋です。本多康俊・俊次(康俊の長男。元和7年(1621)に膳所城から西尾城へ移封となりました。)の時代に西尾城の改修が行われた記録はありませんが、家紋瓦は二之丸・東之丸・三之丸などで見ついているため本多氏時代に広範囲で工事が行われたと推察されます。



上段：軒丸瓦

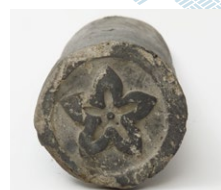
(左から) 立葵紋(本多氏)
立葵紋(本多氏)
山形紋(増山氏)

下段：鬼瓦

(左) 柄杓水車紋(土井氏)
(右) 一ツ葉葵紋(大給松平氏)

総構えの工事

『鶴城紀』などには、城下町を土塁と堀で囲んだ総構えの工事を寛永15年(1638)に入城した太田資宗が着手し、井伊直之が引き継ぎ、明暦元年(1655)に完成したと記されています。しかし、正保2年(1645)作成の正保城絵図にはすでに総構えが描かれるなど、『鶴城紀』などの記述との整合性には疑問があります。しかし、太田氏の家紋瓦は本多家に次いで多く見ついていることから、太田資宗が城郭整備を行っていた可能性は高いといえます。



太田氏家紋瓦(桔梗紋)



本丸は土塁と土堀に囲まれ、四隅に櫓^{やぐら}がありました。曲輪内には建物はなく、丑寅櫓の下に御剣八幡宮が祀られていました。曲輪南西側から北側にかけて土塁が残り、丑寅櫓台および北側石垣は往時の姿を留めています。

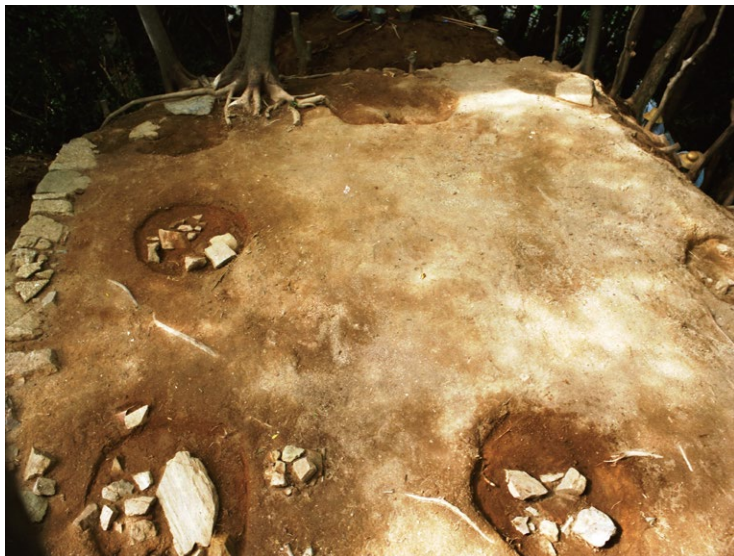
■ 本丸^{うしとらやぐら}丑寅櫓

本丸北東隅の一段小高く、城内で最も高い場所に築かれた三重櫓です。二之丸に天守が移る前は、天守の役割を担っていたと考えられています。一重の平面は3間2尺四方（約6m）で、三重櫓としては小型です。平成8年に木造で再建されました。

第4次調査

丑寅櫓の櫓台は北・東・西側に石垣が積まれ、上面は一辺約6.5mの方形であることが確認されました。また、上面8か所で礎石跡が見つかっています。

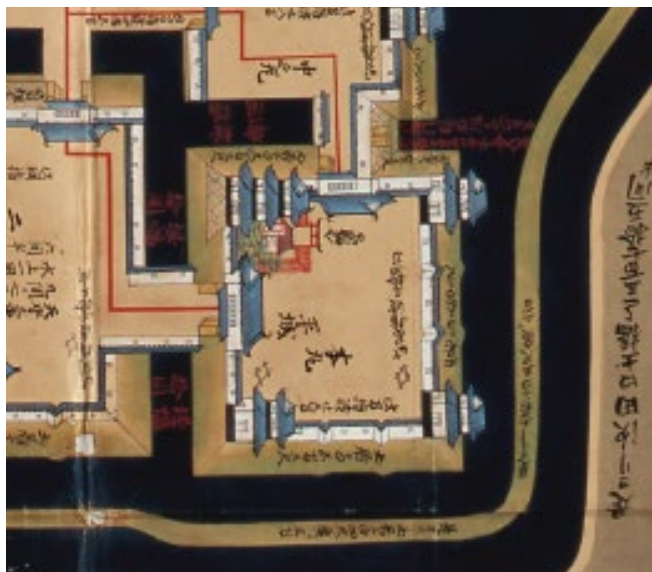
石垣は、自然石を用いた野面積みで、隅角部の石垣は廃城時に意図的に崩された痕跡が確認されました。



本丸丑寅櫓発掘調査の様子（南から撮影）



丑寅櫓北側石垣（北から撮影）



「三河国西尾城絵図」

国立公文書館・内閣文庫所蔵

■ 本丸丑寅櫓北側石垣

花崗岩^{かこうがん}の大型石材が用いられた櫓台の石垣の下方には小形の石材が貼り石状に積まれています。貼り石状の石積みは上端9.5m、下端11m、高さ6.5mの範囲で確認されています。勾配は48度で、佐久島産石材が使用されています。

東側法面にはなく、北面のみが貼り石状の石積みとなっているのは、二之丸の御殿からの眺望を意識していると考えられています。



表門（南から撮影）

■ 表門

本丸と姫丸をつなぐ門で、表門脇の石垣と門の礎石が一部残っています。石垣は自然石の野面積みで、石材の一部には、戦国時代の墓石が転用されています。石垣西側（写真左）の裏側には、丑寅櫓に上る石段が数段残っています。また、門の礎石と伝わる石材は石垣の脇にあり、平坦面中央付近に方形の穴があげられています。

■ 裏門

本丸と二之丸をつなぐ門で、裏門脇には石垣が残っています。

石垣は自然石の野面積みで、下段は石垣築造当時のままである可能性がありますが、中段以上は積み直しが行われたと推察されます。石垣に使用された石材は、幡豆石・領家変成岩・佐久石が確認されており、近隣から石材の調達が行われていたことがわかります。幡豆石の一部には採石時に打ち込まれた矢穴が残っています。

第10次調査

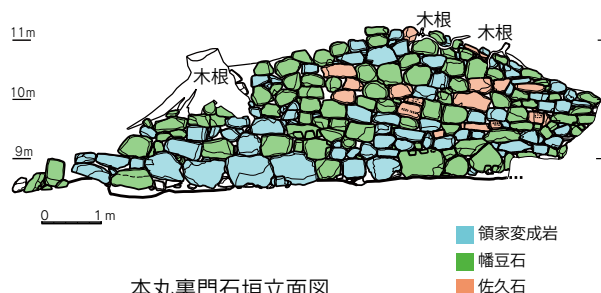
裏門の遺構・石垣の構築方法を確認するために確認調査を行った結果、石材は盛土の上に直接積まれていることが確認されました。本丸の地盤は堀を掘削した際に生じた土を盛土して約70cmかさ上げされていることが判明しました。



裏門発掘調査の様子（西から撮影）



裏門下層の堆積状況（西から撮影）



本丸裏門石垣立面図



本丸の馬出的な曲輪です。

南東隅に辰巳櫓があり、現在も櫓台は築山となり残っています。



姫丸辰巳櫓跡（西から撮影）



天守や御殿が築かれた西尾城の中心的な曲輪でした。廃城後は浄土真宗の説教所や幼稚園、体育館などが建てられたため、遺構は失われてしまいました。二之丸跡整備に伴い行われた発掘調査では天守台の石垣が見つかるなど、大きな成果が上がっています。



天守台石垣（西から撮影）



第7次調査区全景（東から撮影）



天守台盛土断面（南から撮影）

第7次調査

二之丸御殿に関連した土蔵の地下式遺構・井戸・柵列きくれつが見つかりました。これらの遺構は二之丸を平面的に描いた「二之丸居所之図」と重ね合わせることができます。また、廃城時に大量の瓦が投げ捨てられた廃棄土坑も見つかっています。

第9次調査

織豊期の障子堀(5頁参照)を埋めた後、一帯を固くしまった土で整地した痕跡が確認されました。台地端部付近では天守台の盛土と推定される砂を多く含んだ土を水平に幾度も積み重ねた層が確認され、天守台が台地から西側の軟弱な低地部へ張り出して築かれていたことが判明しました。

天守台西側の低地部では、天守台下段の腰巻石垣と胴木が見つかりました。腰巻石垣は不安定な場所に築造された天守台を補強するためのもので、花崗岩が野面積みされていました。また、石垣の沈下を防ぐために胴木(マツ材)が敷かれていました。

第6次調査

二之丸東側の堀跡と石垣の裏込石うらごめが見つかりました。また、長方形の土坑のなかに木が埋め込まれた土坑が7基見つかりました。堀跡と並行しているため、丑寅櫓に関連した遺構と推定されます。



土坑検出状況（北から撮影）



堀跡・裏込石・土坑（下が北）



二之丸の北側にあり、喰違門^{くいちがひ}で東之丸と連結していました。曲輪内に建物はなく、練兵場だったようです。現在でも北之丸と三之丸との間は一段低くなっていて、堀の名残を残しています。

第12次調査

北之丸東側の堀跡の確認調査では、堀跡の幅が15.6mで、深さは4m以上であることが確認されました。絵図には「堀幅拾間」（約18m）と記されていますが、実際は少し狭かった可能性があります。



北之丸堀跡（東から撮影）



西尾城内では最も大きな曲輪で、家老などの上級武士の屋敷や勘定所などがありました。三之丸の出入口の大手門と新門は城郭部と城下町とをつなぐ役割を担っていました。現在も錦城町内には江戸時代の道筋が残っています。



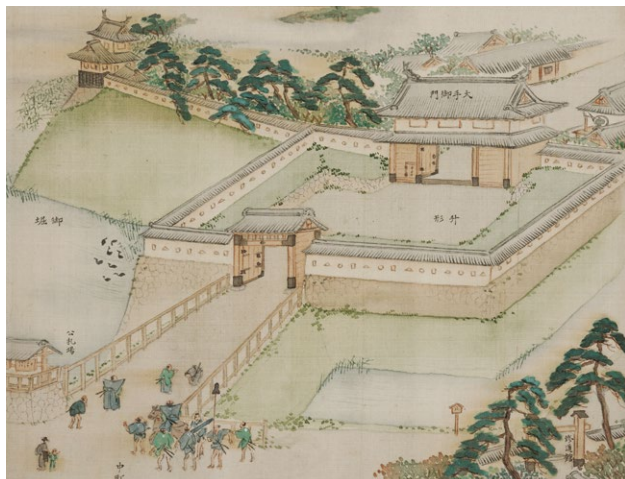
大手門の枳形・堀跡（北から撮影）

第15次調査

大手門の枳形が江戸時代前期に盛土によって造成されていたことが判明しました。また、絵図には記録のない大手門北側の堀跡の深さが4.5m（推定）であることが判明しました。また枳形の北側法面裾付近では土留め用に打ち込まれた木杭が見つかり、大手門の枳形の斜面の裾部の位置を確認することができました。



杭列の検出状況（東から撮影）



大手門

西尾城大手門は、一之門（薬医門）と二之門（櫓門）の2つの門からなる石垣と塀で囲まれた枳形門で、三之丸塁線から堀側へ凸状に張り出す構造（出枳形／外枳形）でした。2つの門は直線的には並ばず、城内を見通せないように工夫されていました。

「旧西尾城絵巻」
（個人蔵・市寄託）



← 第15次調査の成果
の解説動画はこちら



上級武士の屋敷や米蔵などがあり、太鼓門を通じて三之丸と連結していました。東側の土塁の一部が尚古荘内に残されています。



米蔵（北から撮影）

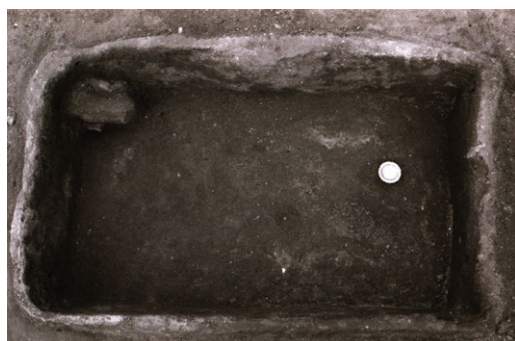
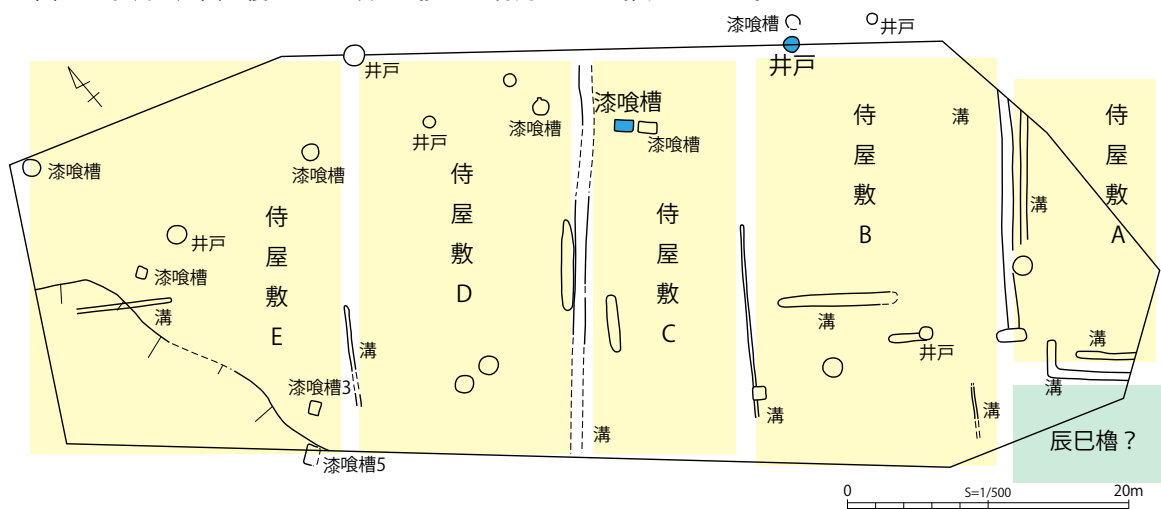
第13次調査

調査区北側では南北5.1m、東西3.6mの大型土坑が見つかりました。遺構内には深さ約1mにわたり川砂が充填されていて、根石と推定される石材が7か所で確認されました。同様の遺構は第3次調査区でも確認されています。

本遺構は絵図の分析から米蔵の遺構と想定されます。川砂は蔵の地下の通気性をよくし、湿気を取り除くために用いられたと考えられます。礎石の配列は複数認められることから、米蔵は何度か建て替え直されたと推察されます。

第1次調査

幅約30cmの浅い溝で区画された5区画の侍屋敷や、東之丸辰巳櫓に関連した遺構が見つかりました。侍屋敷の区画は幕末に描かれた絵図(7頁参照)とほぼ一致しています。また、屋敷内からは漆喰槽や井戸なども見つっています。漆喰槽は水が漏れないように砂と石灰で塗り固めた漆喰で表面を覆っていて、流し場として利用されたと推定されます。



漆喰槽



井戸

城下町の発掘調査 — 和泉町遺跡 —

丁田門と天王門との間に位置する和泉町には下級藩士が暮らす足軽屋敷が広がっていました。現在も道幅は狭く、町割りは当時の面影を残しています。

足軽屋敷跡の発掘調査で見つかった陶磁器類は、城郭内部からの出土品と異なり、遠隔地のものではなく、地元産で占められていて、居住者の階層差が表れています。



平成10年調査区全景（北から撮影）

近世の遺物

陶磁器

上級武士が暮らした東之丸の侍屋敷の調査では、江戸時代後期の焼き物が多数出土しており、当時の豊かな生活の様子を垣間見ることができます。

瀬戸窯産の馬の目皿などに加え、肥前窯産(佐賀県)の染付磁器皿や香炉、三田窯産(兵庫県)の青磁鉢、美濃窯産(岐阜県)染付陶器の広東茶碗・筒型湯呑・仏飯具といった遠隔地を含む様々な産地のものが出土しています。



焼塩壺

焼塩壺は、細かく砕いた粗塩^{あらじお}を詰めて焼くための、素焼きで小型のコップ状の容器です。容器ごと釜に入れてじっくり焼くことで、上質な精製塩となり、上級武士層の特別な宴席で食膳に添えられました。

西尾城では東之丸の侍屋敷から9点出土しています。地方小藩の藩士層まで焼塩壺が流通していたことを示す貴重な資料です。



瓦

江戸時代になると、西尾城内の櫓・門・土塀など様々な建物に瓦が葺かれました。

軒瓦^{のきがわ}は雨落ちをよくするための瓦^{がとう}当が付され、様々な文様で飾られています。軒丸瓦の瓦当には、城主の家紋が用いられたほか、中央に三ツ巴文、その周囲に連珠を配した文様が用いられることが一般的でした。軒平瓦^{のきひらがわ}の瓦当には唐草紋が多く用いられています。

このほかにも、廃城後に払い下げられたと伝わる鯰瓦^{しやちがわ}や鬼瓦が残されていますが、使用されていた建物はわかっていません。鯰瓦の多くは尻尾が欠損していて、廃城時に故意に破壊されたとも考えられます。



廃城後の西尾城

西尾城は廃城後に城内の土地や建物は払い下げられ、明治10年(1877)ごろにはその姿が消えてしまいました。

発掘調査では、三之丸家老宅跡に明治時代に築かれた庭園や、大手門跡に建てられた西尾銀行の造成に伴う石垣の基礎、桐木など、廃城後の土地利用に関する遺構が確認されています。



第14次調査区 三之丸家老宅跡の庭園

西尾城 年表

〔注〕地元の伝承など同時代史料で確認できないものは、「※」を付した。

時代	和歴	西暦	城主等	できごと	備考
弥生		約2,000年前		弥生時代のムラが形成される。	
鎌倉・室町	承久 3年	1221	足利義氏	西尾城創建(『鶴城紀』ほか)。※	承久の乱(1221)
	建長 3年	1251	足利長氏	鶴ヶ崎町に鶴ヶ崎八幡宮を創建。※	
	延文元年	1356	吉良満義 ／吉良満貞	満義死去。東条吉良氏の分立。※	室町幕府の成立(1336) 観応の擾乱(1350～1352)
戦国	永正10年	1513	吉良	吉良義信	この頃吉良氏は在京をあきらめ、吉良荘等の領地経営に専念する。※
	天文 9年	1540	吉良義郷	義郷が西尾城で討死。※	第一次安城合戦(1540)
	天文18年	1549	吉良義安	今川氏に西尾城を攻められ、矢文で降伏を迫られる。	小豆坂の戦い(1548)
	弘治元年	1555	吉良義安	今川氏に再び反逆。「西尾城」の名が初めて史料に登場する。	
	弘治 3年	1557	今川	三浦元政 ／牧野成定	今川氏が西尾城を接收し、城番を置く。 西尾城の普請が行われる。(詳細は不明)
	永禄 4年	1561	松平 ／徳川	酒井政家	西尾城を松平元康配下の酒井政家が攻略し、城代に任命される。
	永禄 7年	1564		酒井重忠	御剣八幡宮に鰐口を寄進。
織豊	天正 6年	1578	豊臣	田中吉政	織田信長が吉良荘で鷹狩りを行った際に、西尾城に立ち寄る。
	天正 7年	1579		酒井重忠	松平信康事件。家康が西尾城下の康全寺に陣を構える。
	天正13年	1585		田中吉政	三河国内の人足が動員され、大改修(丸馬出・障子堀の掘削)が行われる。 9月と11月に家康が見廻りに訪れる。
	天正18年	1590	豊臣	田中吉政	家康、関東移封。豊臣方大名の田中吉政が城主となる。 三之丸の造成。城郭を拡張して城下町を整備。
江戸	慶長 6年	1601	本多	本多康俊	本多氏、入封。(20,000石)。西尾藩の成立
	慶長 7年	1602	本多	本多康俊	中町に縁心寺を建立。
	元和 3年	1617	松平	松平成重	松平氏、入封。(20,000石)
	元和 7年	1621	本多	本多俊次	本多氏、入封。(35,000石)
	寛永 2年	1625		本多俊次	妙満寺を伊文天王下へ移転。
	寛永15年	1638	太田	太田資宗	太田氏、入封。(35,000石) 総構えの工事を計画。
	寛永16年	1639		太田資宗	御剣八幡宮を再建。
	正保元年	1644	井伊	井伊直之	井伊氏、入封。(35,000石) 正保城絵図の作成・提出。
	明暦元年	1655		井伊直之	総構えの完成。
	万治 2年	1659	増山	増山正利	増山氏、入封。(20,000石)(増山氏2代) 大給町へ妙満寺を移築。
	寛文 3年	1663	土井	土井利長	土井氏、入封。(23,000石)(土井氏4代) 御剣八幡宮の社殿再建。
	延宝 6年	1678		土井利長	瓦町に利勝寺の建立。
	宝永 4年	1707		土井利意	宝永地震により、天守が大破するなど大きな被害。
	享保13年	1731	土井	土井利庸	伊文神社の補修。
	延享 4年	1747	三浦	三浦義理	三浦氏、入封。(23,000石)(三浦氏2代)
	明和元年	1764	松平	松平乗佑	松平氏、入封。(60,000石)(松平氏5代)
	安永 5年	1776		松平乗完	三之丸北端に吉祥院を建立。
	天明 2年	1782		松平乗完	須田町の商家から出火。須田町が全焼。
	寛政 4年	1792		松平乗完	内堀・外堀のすべて堀浚い。
	文化元年	1804		松平乗寛	本丸などの土塁・石垣工事。
	文化13年	1816		松平乗寛	会ヶ下から出火。足軽屋敷(和泉町)まで延焼。
	文化14年	1817		松平乗寛	百石町から追羽門への道が開通。
	天保 8年	1837		松平乗寛	太鼓門脇の石垣修理。
	天保12年	1841		松平乗全	天神町に学問所を置く(のちの修学館)。
	嘉永 3年	1850		松平乗全	大手門の修理。
	嘉永 7年	1854		松平乗全	地震で大破した姫丸などの修理。
	万延 2年	1861		松平乗全	追羽門・天王門の修理。
	文久 3年	1863		松平乗秩	松平乗全、隠居して三之丸の隠居屋敷に住む(～1865)。 参勤交代緩和による江戸詰藩士の帰藩のため追羽門外に新屋敷を新設。
	元治元年	1864		松平乗秩	馬場町と新屋敷との間に道を通すために土塁を切り割る。
	元治元年	1864		松平乗秩	馬場町と新屋敷との間に土橋を作る。
明治	明治 4年	1871		廃藩置県。 太鼓門・大手門・新門・五カ所門の廃止。	版籍奉還(1869)
	明治10年	1877		西尾城の遺構が完全に取り払われる。	

編集・発行:西尾市教育委員会文化財課

発 行 日:令和6年7月6日

■ 6人の武将イラストはすずき孔氏作画です。
転載はご遠慮ください。

・西尾城跡解説動画
・展示解説動画(※7月中旬に公開予定)
はこちら→
西尾市文化財チャンネル

